

令和 3 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K15388

研究課題名(和文) 死別が遺族に与える肯定的影響に関する質的検討

研究課題名(英文) A qualitative study of the positive impact of bereavement on bereaved families

研究代表者

嶋田 和貴 (Shimada, Kazuki)

京都大学・医学研究科・特定講師

研究者番号：80813906

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：がんで配偶者を亡くした遺族の心的外傷後成長(Posttraumatic Growth: PTG)の構成要素とその発現プロセスを明らかにすることを目的に21名の遺族にインタビュー調査を実施した。まず10名の遺族にインタビューを実施し、インタビューデータを現象学的アプローチにて質的帰納的に分析を行った。分析を行う中で結果に特徴が見られ、その特徴に遺族の背景が影響している可能性を考慮し、背景の異なる11名の遺族を新たにリクルートした。COVID-19感染拡大によりインタビュー調査とともに分析が遅延し、19名分のみ分析が終了している状況である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

成果として結果を示すまでには至っていないが、現時点での結果内容からがんで配偶者を亡くした遺族の心的外傷後成長に関する新たな示唆を得ることができる可能性がある。心的外傷後成長の構成要素とそのプロセスを明らかにすることは、遺族に対する新たな支援への寄与になると考えられる。

研究成果の概要(英文)：An interview survey was conducted with 21 bereaved families with the aim of clarifying the Posttraumatic Growth (PTG) construct and its expression process in survivors who have lost a spouse to cancer. First, interviews were conducted with ten bereaved families, and the interview data were analyzed phenomenologically. In the course of the analysis, we found some characteristics in the results, and considering the possibility that the background of the bereaved family affected the characteristics. Then, we also recruited 11 new bereaved families with different backgrounds. Due to the spread of COVID-19, the analysis has been delayed along with the interview survey, and the analysis has been completed only for 19 participants.

研究分野：緩和医療学

キーワード：がん遺族 心的外傷後成長

1. 研究開始当初の背景

国立がん研究センターがん情報サービスのがん登録・統計の年次推移によると、2015年のがん死亡数は370,346人で1985年の約2倍であり、2017年のがん死亡数予測は378,000人である。がん患者や家族への緩和ケアの提供が重要な課題であることは当然ながら、がん患者の遺族に対するケアも求められる。“bereavement(死別)”は一般的に人生における最大の困難な経験である。がん患者の終末期における quality of life(生活の質)の低下は遺族の生活の質に影響を及ぼすため(Wright et al. JAMA 2008)、死別の遺族に与える negative impact(悪影響)に関して多くの研究がなされている。一方で死別には何らかの positive impact(肯定的な影響)が存在する可能性がある(Hatano et al. J Pain Symptom Manage 2015)。本邦では、死別が与える肯定的な影響に焦点を当てた研究は少ないが、実際には、遺族は悲嘆を経験するだけでなく、人間的成長を及ぼす肯定的な変化が指摘されている(坂口他. 日本保健医療行動科学会年報 2000)。一般的外傷体験による人間的成長は“stress related growth(ストレス関連成長)”や“posttraumatic growth(PTG、外傷体験後成長)”と呼ばれ、海外では尺度が作成され(Tedeschi et al. J Trauma Stress 1996)、日本語版尺度の妥当性も検討されている(田口他. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要 2006)。しかし、これまでのところ死別による stress related growth や posttraumatic growth などの“growth(成長)”に関する調査は大変少ない。海外では PTG に関する研究を背景とした様々な死別支援プログラムの報告がある(Sandler et al. Dev Psychopathol 2016)。調査票による研究では、Posttraumatic Growth Inventory (PTGI) が posttraumatic growth 尺度として頻用されるが、PTGI の原版である海外版と日本版の間で異なる因子構造が指摘されるなど(田口他. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要 2006)、海外の知見をそのまま本邦に応用することが妥当とは考え難い。最近、スピリチュアルな要素も追加された拡張版の翻訳である日本語版-PTGI 拡張版(以下 Extended Version of the PTGI-Japanese を略した PTGI-X-J を用いる)も発表された(Tedeschi et al. J Trauma Stress 2017)が、これらには概念的な項目が多く、具体性にやや欠けるため、結果をそのまま実地臨床で活用することが困難である。そのため、先行研究では PTGI との性別や教育歴、経済状態などの人口動態学的要因との関連性について量的検討を行ったものが多い。

一方で、がん患者の配偶者やパートナーの PTG では、人口動態学的要因だけでなく、互いの関係性や患者の PTG が関連要因となることが特徴として指摘されている(Weiss et al. Psychooncology 2004)。がん患者の配偶者やパートナーの PTG では夫婦関係や夫婦の価値観にコミットしていること、患者からの愛情を感じていることが関係性における関連要因の特徴である。しかし遺族の PTG では他者とのどのような関係性が関連要因であるか不明である。

2. 研究の目的

配偶者に限定し、がんで配偶者を亡くした遺族の PTG の構成要素とその発現プロセスを明らかにする。

3. 研究の方法

1) 対象

がんで配偶者を亡くし、死別経験を経て何らかの変化を自覚している遺族を募集した。日本において、配偶者と死別し独身となる割合が一定数出現する年齢が40歳以上であることから、対象年齢は40歳以上とした。死別からの期間は、先行研究より複雑性悲嘆のリスクが低くなる死別

後 6 か月から、遺族会からアドバイスを受け 10 年以下とした。また、がんで配偶者を亡くした遺族の PTG を捉える上で、患者との闘病生活は重要な経験であると考え、患者との闘病期間が 6 か月以上有することを条件とした。

2) リクルート方法

PTG には性別が影響することを考慮し、先行研究 (Dejanilton M S, 2018; Fiona WT, 2017) を参考に男性 10 名、女性 10 名の計 20 名をリクルートすることを目指した。遺族は臨床心理学や医師、遺族会の代表メンバーを通じてリクルートされた。リクルートの際、遺族に「大切なご家族を亡くされたことはとても辛い経験だと思いますが、そのようなお辛い経験をしたからこそこれまでとは違うな、変わったなと思われることはありますでしょうか?」と質問することによって、遺族に変化の自覚があるかの確認を行った。変化の自覚がある遺族に対して、研究の紹介を行い、参加希望があった場合、研究者より書面および口頭にて研究内容の説明を行った。

3) データ収集方法

2019 年 7 月から 2021 年 4 月までの間に 21 件のインタビューを実施した。当初、対面でのインタビューのみを実施していたが、2020 年 4 月以降は COVID-19 の影響により Zoom および電話によるインタビューも導入し、1 人計 2 回のインタビューを実施した。インタビュー場所および方法は対象者に選択してもらい、1 回目のインタビューは対面が 13 名 (大学 7 名、自宅 4 名、遺族会の会場 2 名)、Zoom が 6 名、電話が 2 名で、2 回目のインタビューは対面が 1 名 (自宅)、Zoom が 6 名、電話が 14 名であった。インタビューは録音し、1 回目が 53~107 分、2 回目が 11 分~72 分であった。インタビューガイドは、PTG に関する先行研究を基に項目を研究者間で検討し、最初の質問を「あなたは、大切なご家族ががんと診断されてから今までにどのような時に変化を感じましたか?」とし、遺族が感じている変化についてインタビューを実施した。

4) 分析方法

現象学的アプローチを用いて、がんで配偶者を亡くした遺族の PTG のプロセスを探求した。現象学的アプローチは、経験における事象そのものへ立ち返り、そこから再度、経験を捉え直すことによって、経験に立ち現れてくる意味を記述することを特徴とする (松葉, 2014)。本研究では、がんで配偶者を亡くした遺族の PTG とは何かを明らかにすることを目的としているため、このアプローチを選択した。

分析はインタビュー直後より開始し、Giorgi, A の方法論に従い、次の 5 段階で実施した ; (1) 語り全体の概要を掴み遺族の PTG の意味を見出す (2) 3 名で共通した PTG の意味単位を決定する (3) 遺族の語り立ち返り文章を書き換え、遺族の PTG の意味内容および構成要素を明らかにする (4) 明らかになった PTG の意味内容を対象者に確認する (5) 21 名の遺族の PTG の意味内容からパターンを導き出し、がんで配偶者を亡くした遺族の PTG の構成要素とその発現プロセスを明らかにする。分析は現象学の専門家を含む 3 名の研究者で実施した。

また、分析を進める中で、遺族の PTG の体験は、身体から生み出された知覚を手がかりに世界を考察する Maurice Merleau-Ponty の現象学と通ずるものあるとの気づきを得た。そこで、第 3 段階は Maurice Merleau-Ponty の現象学の考えに基づき分析を実施した。

4. 研究成果

COVID-19 感染拡大により、インタビュー調査および分析が遅延し、19 名分の結果のみ得られて

いる状況であり、データ分析継続中である。そのため、研究期間に学会発表や論文などで公開できるほどの十分な研究成果を得ることは出来なかった。その一方で、本来 PTG はポジティブな変化とされているが、現時点で得られている結果を概観するとがんで配偶者を亡くした遺族の PTG はポジティブ・ネガティブで評価できるものではない可能性が示唆されており、PTG 概念に関する新たな視点が得られる可能性が期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 近藤めぐみ
2. 発表標題 遺族の心的外傷後成長に関する看護研究のUp to Date
3. 学会等名 日本グリーフ&ビリーブメント学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	近藤 めぐみ (Kondo Megumi)	京都大学・医学研究科人間健康科学系専攻・大学院生（博士課程） (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------